

博士学位論文審査要旨

2013年11月20日

論文題目：知的障害児の母親におけるマルトリートメントに関する基礎研究

学位申請者：李 仙恵

審査委員：

主 査： 社会学研究科 教授 黒木 保博

副 査： 社会学研究科 教授 小山 隆

副 査： 岡山県立大学 教授 中嶋 和夫

要 旨：

本論文は、知的障害児をもつ家族の支援に関する指針を得ることをねらいとして、就学前の知的障害児の母親の心理的マルトリートメントに関連する要因を明らかにすることを目的としている。

序論では、研究意義の明確化のために、障害者虐待防止法の施行を巡る動向と障害児のマルトリートメントの現状やその予防に目を向ける必要性を指摘した。次に先行研究レビューでは、マルトリートメントの発生プロセスの解明を志向した研究が進んでいるものの、知的障害児をもつ家族のマルトリートメントに関するメカニズムは十分に解明されていないこと、加えてその予防に関する指針も構築されていなかったことを指摘している。これまでの先行研究では明らかにされていない知的障害児の母親の心理的マルトリートメントのメカニズムを解明するため、以下の4つの課題を立て検証を行った。課題1：知的障害児の母親を対象とする心理的マルトリートメント測定尺度の開発、課題2：知的障害児の母親の育児負担感と心理的マルトリートメントの関係、課題3：知的障害児の母親のコミュニケーション能力と心理的マルトリートメントの関係、課題4：夫の育児参加による夫の情緒的サポートに関する母親の認知と心理的マルトリートメントの関係である。

本論の各章においては、これらの課題について仮説モデルの検証を行っている。調査対象者は全国の知的障害児通園施設12カ所を利用する母親とした。これらの母親のデータ分析を行い、統計解析は構造方程式モデリングを用いている。

結論の章では、課題1～課題4より得られた知見から「知的障害児家族支援」について、1) 心理的マルトリートメントの明確化の必要性、2) 知的障害児の母親の育児負担感軽減のための支援、3) 知的障害児の母親のコミュニケーション能力向上の

ための支援， 4）知的障害児の父親の育児参加のための支援， 5）養護者の心理的マルトリートメントのチェックリスト策定の必要性， 6）知的障害児の母親の心理的マルトリートメントに関連する要因のメカニズムの解明， という研究成果ならびに支援に関する指針をまとめている。

最後に，今後の研究課題として， 1）地域や国等が異なるサンプルを用い，本研究で開発できた心理的マルトリートメント測定尺度の因子構造モデルの強度を，交差妥当性の検討として，重ねて確認していくこと， 2）マルトリートメントの発生予防に関連する多くのリスク因子と補償因子を考慮した包括的な枠組みで，さまざまな因子との関連性を検証していくことの必要性をあげている。

本論文には今後の研究課題が残されているものの、わが国の知的障害児の母親のマルトリートメントに関する基礎研究成果は多くの示唆を与えるものとして評価できる。

以上によって、本論文は、博士（社会福祉学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

2013年11月20日

論文題目：知的障害児の母親におけるマルトリートメントに関する基礎研究

学位申請者：李 仙恵

審査委員：

主 査： 社会学研究科 教授 黒木 保博

副 査： 社会学研究科 教授 小山 隆

副 査： 岡山県立大学 教授 中嶋 和夫

要 旨：

2013年11月20日（水）14時から1時間30分にわたり、申請者による公開学術講演会を臨光館 212 教室にて行った。引き続き、16時より約1時間にわたり、上記3名の主査・副査による口頭試問を行った。

公開学術講演会においては、申請者は博士学位申請論文内容に関する講演を行い、本論文の独自固有性を明快に披露し、体系的かつ実証的研究による課題と仮説モデルの検証、研究成果ならびにこれから導かれた支援指針を論証した。講演会出席者からの質問に対して的確な回答をした。

また口頭試問においても、審査委員からの学位申請論文内容と社会福祉学に関する質疑に対して的確に回答し、豊かな知識、学力を有していることを証明した。また同時に、論文作成に関する外国語能力(英語)は十分に保有していることを確認した。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 知的障害児の母親におけるマルトリートメントに関する基礎研究
氏 名： 李 仙恵

要 旨：

本論文は、障害児家族の支援に関する指針を得ることをねらいとして、就学前の知的障害児の母親の心理的マルトリートメントに関連する要因を明らかにすることを目的とした。

序論では、研究の意義を明確にするために、社会的背景、学問的課題の検討を行い、研究の目的と課題を設定した。社会的背景では、障害者虐待防止法の施行を巡る動向と障害児のマルトリートメントの現状やその予防に目を向ける必要性を指摘した。学問的課題では、子どものマルトリートメントの発生理論に関する文献、子どものマルトリートメントの発生要因に関する文献、障害児のマルトリートメントに関する文献、障害児家族のストレスに関する文献をレビューした。この結果、子どものマルトリートメント発生の複数のリスク要因とその発生を阻止する補償要因が検討され、近年はマルトリートメントの発生プロセスの解明を志向した研究が進んでいるものの、障害児家族のマルトリートメントに関するメカニズムはいまだもって十分に解明されていないことに加え、その予防に関する指針も構築されていなかった。これらのことから、先行研究で明らかにされていない知的障害児の母親の心理的マルトリートメントのメカニズムを解明するため、以下の4つの課題を立て検証を行うこととした。

課題1：知的障害児の母親を対象とする心理的マルトリートメント測定尺度の開発

課題2：知的障害児の母親の育児負担感と心理的マルトリートメントの関係

課題3：知的障害児の母親のコミュニケーション能力と心理的マルトリートメントの関係

課題4：夫の育児参加による夫の情緒的サポートに関する母親の認知と心理的マルトリートメントの関係

本論では、序論で立てた本研究の目的と課題に基づき、心理的マルトリートメントの概念化、関連理論と先行研究の検討、仮説モデルの設定及び検証を行った。

まず、課題1では、「知的障害児の母親を対象とする心理的マルトリートメント測定尺度の開発」のために、「心理的マルトリートメントは、拒絶 (spurning)・人格の否定 (exploiting / corrupting)・威嚇 (terrorizing)・無視 (denying emotional responsiveness)・孤立化 (isolating) という構造から成る」とした因果構造モデルを構成し、そのモデルのデータに対する適合度ならびに要素間の関連性について検討した。調査対象者は、知的障害児通園施設12カ所を利用する母親とし、分析には知的障害児の母親163人のデータを用いた。統計解析では、心理的マルトリートメントを拒絶、人格の否定、威嚇、無視、孤立化で構成される5因子斜交因子モデルとして仮定し、因子構造モデルの側面から、構造方程式モデリングを用いた構成概念妥当性の検討を行った。その結果、仮説モデルのデータへの適合度は、CFI=0.927, RMSEA=0.083 と統計学的な許容水準を満たしていた。このことは、心理的マルトリートメントは拒絶、人格の否定、威嚇、無視、孤立化という構造からなるという仮説が支持されたことを意味している。この結果は、仮説が依拠する先行研究を支持するものである。また、新たに開発した尺度は、構成概念妥当性に加えて信頼性を備えていることが示された。

課題2では、「知的障害児の母親の育児負担感と心理的マルトリートメントの関係」の解明のために、Bronfenbrenner (1977) の人間発達生態学理論と関連する先行研究を基礎とする「母親の育児負担感が心理的マルトリートメントに影響する」とした因果関係モデルを構成し、そのモデルのデータに対する適合度ならびに要素間の関連性について検討した。なお、調査対象者は

課題 1 と同一で、分析には知的障害児の母親 158 人のデータを用いた。仮説モデルのデータへの適合性は構造方程式モデリングを用いて検討した。その結果、仮説モデルのデータへの適合度は、 $CFI=0.926$, $RMSEA=0.070$ であった。育児負担感から心理的マルトリートメントの各因子に向かうパス係数はすべて統計学的な許容水準を満たしていた。このことは、知的障害児の母親の育児負担感と心理的マルトリートメントの関連は、育児負担感から心理的マルトリートメントへと向かうという仮説が支持されたことを意味している。この結果は、Bronfenbrenner の人間発達生態学理論と関連する先行研究を支持するものである。以上の結果により、知的障害児の母親の育児負担感が児に対する心理的マルトリートメントに影響することを考慮するならば、障害児家族における心理的マルトリートメント予防のために母親の育児負担感を軽減することが示唆された。

課題 3 では、「知的障害児の母親のコミュニケーション能力と心理的マルトリートメントの関係」の解明のために、Lazarus らのストレス認知理論に基づく Hillson ら (1994) の児童虐待のストレスとコーピングモデルを基礎とする「母親のコミュニケーション能力が直接的にまたは育児負担感を通して間接的に心理的マルトリートメントに影響する」とした因果関係モデルを構成し、そのモデルのデータに対する適合度ならびに要素間の関連性について検討した。なお、調査対象者は課題 1 と同一で、分析には知的障害児の母親 162 人のデータを用いた。仮説モデルのデータへの適合性は構造方程式モデリングを用いて検討した。その結果、仮説モデルのデータへの適合度は、 $CFI=0.895$, $RMSEA=0.092$ であった。育児負担感から心理的マルトリートメントの各因子に向かうパス係数はすべて統計学的な許容水準を満たしていた。また、母親の「コミュニケーション能力」から「育児負担感」に向かうパス係数は -0.233 であり、母親の「コミュニケーション能力」から「拒絶」に向かうパス係数は -0.434 、「威嚇」に向かうパス係数は -0.215 、「無視」に向かうパス係数は -0.491 であり、統計学的な許容水準を満たしていた。このことは、知的障害児の母親のコミュニケーション能力と心理的マルトリートメントの関連は、母親のコミュニケーション能力が直接的に心理的マルトリートメントに影響するだけではなく、育児負担感を通して間接的に心理的マルトリートメントに関連していることを意味している。この結果は、Lazarus らのストレス認知理論に基づく Hillson らの児童虐待のストレスとコーピングモデルを支持するものである。以上の結果により、知的障害児の母親のコミュニケーション能力の向上は、母親の育児負担感の軽減及び心理的マルトリートメントの予防にとって有効な方策になることが示唆された。

課題 4 では、「夫の育児参加による夫の情緒的サポートに関する母親の認知と心理的マルトリートメントの関係」の解明のために、Lazarus らのストレス認知理論に基づく Hillson らの児童虐待のストレスとコーピングモデルを基礎とする「夫の育児参加の頻度が夫の情緒的サポートに関する母親の認知に関連し、さらに母親の育児負担感と心理的マルトリートメントに影響する」とした因果関係モデルを構成し、そのモデルのデータに対する適合度ならびに変数間の関連性について検討した。なお、調査対象者は課題 1 と同一で、分析には知的障害児の母親 162 人のデータを用いた。仮説モデルのデータへの適合性は構造方程式モデリングを用いて検討した。その結果、仮説モデルのデータへの適合度は、 $CFI=0.951$, $RMSEA=0.086$ であった。育児負担感から心理的マルトリートメントの各因子に向かうパス係数はすべて統計学的な許容水準を満たしていた。また、「夫の育児参加」から「夫の情緒的育児サポートに関する母親の認知」に向かうパス係数は 0.669 、「夫の情緒的育児サポートに関する母親の認知」から「母親の育児負担感」に向かうパス係数は -0.277 であり、統計学的な許容水準を満たしていた。このことは、夫の育児参加による夫の情緒的サポートに関する母親の認知と心理的マルトリートメントの関連は、夫の育児参加の頻度が夫の情緒的サポートに関する母親の認知を促進し、夫の育児参加による夫の情緒的サポートに関する母親の認知が母親の育児負担感と心理的マルトリートメントに関連していることを意味している。この結果は、Lazarus らのストレス認知理論に基づく Hillson らの児童虐待のス

トレスとコーピングモデルを支持するものである。以上の結果により、父親の育児参加による夫の情緒的サポートに関する母親の認知を高めることは、母親の育児負担感の軽減及び心理的マルトリートメントの予防にとって有効な方策になることが示唆された。

以上、4つの仮説モデルの検証により課題1、課題2、課題3、課題4を解明し、知的障害児の母親の心理的マルトリートメントのメカニズムについて説明した。

結論では、本研究のまとめ、研究成果、今後の課題について述べた。本研究のまとめでは、本研究の目的、目的達成のために立てた4つの課題、及び仮説モデルの検証から明らかになった知的障害児の母親の心理的マルトリートメントに関連する要因のメカニズムについて再確認した。次いで、研究成果では、課題1～課題4より得られた知見から「障害児家族支援」について、①心理的マルトリートメントの明確化の必要性、②知的障害児の母親の育児負担感軽減のための支援、③知的障害児の母親のコミュニケーション能力向上のための支援、④知的障害児の父親の育児参加のための支援、⑤養護者の心理的マルトリートメントのチェックリスト策定の必要性、⑥知的障害児の母親の心理的マルトリートメントに関連する要因のメカニズムの解明、という研究成果が得られた。最後に、今後の課題として、①地域や国等が異なるサンプルを用い、本研究で開発できた心理的マルトリートメント測定尺度の因子構造モデルの強度を、交差妥当性の検討として、重ねて確認していくこと、②マルトリートメントの発生予防に関連する多くのリスク因子と補償因子を考慮した包括的な枠組みで、さまざまな因子との関連性を検証していくことの必要性をあげた。